

## 木下杢太郎の欧米体験 (5)

Mokutaro Kinoshita in America and Europe (5)

鈴木 秀 治

SUZUKI Hideharu

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail:hsuzuki@vega.aichi-u.ac.jp*

### Abstract

Mokutaro Kinoshita (1885 ~ 1945) was a doctor, but, on the other hand, wrote many poems and novels, and also painted. He went to America and Europe for medical study and was given a great stimulation by foreign culture. I am engaged in consideration of the influence which these experiences in America and Europe had on his work.

### XXI. スペイン・ポルトガル紀行を読む——サラゴサとマドリード

『えすばにや・ぼるつがる記』にその紀行文が取められたスペイン・ポルトガルの都市は、三つに分類することができる。まず、キリシタン文献探索が目的の都市、それから2回の遣欧使節などキリシタンの歴史に関わる都市、さらにはそのどちらにも属さない都市の三つである。第1と第2を兼ねている都市もある。まず第1の都市であるが、スペインではマドリード、セビーリャ、シマンカスであり、ポルトガルではリスボン、コインブラである。第2の都市は、スペインでは、ザビエルの城、サラゴサ、マドリード、アルカラ、トレド、セビーリャであり、ポルトガルでは、リスボン、コインブラである。第1と第2を兼ねている都市は、スペインではマドリード、セビーリャであり、ポルトガルではリスボ

ン、コインブラである。第3の都市であるが、スペインではサン・セバスティアンとコルドバであり、ポルトガルでは皆無である。

こうして整理してみると、杳太郎のスペイン・ポルトガル行きがキリシタン研究の旅であったことが、あらためて確認される。それでは、『えすばにや・ぼるつがる記』に収められた紀行文のなかから、杳太郎らしいものをいくつかを紹介することにしよう。

まずは、「サラゴッサ」をとりあげよう。サラゴッサはマドリードとバルセロナを結ぶ交通の要衝である。この都市にキリシタン文献を蔵する図書館や古文書館はなく、本来なら通過してゆくところだが、2回にわたって日本の遣欧使節が同市を訪れているので、わざわざ途中下車したものである。

この市まちは我我日本人に取つてなかなかになじみ深い土地である。千五百八十五年（天正十三年）陽暦八月の某日に九州諸侯の使者ドン・マンシオ伊東其他三人の青年がここを過ぎてゐる。それは一行が既に羅馬に至り法王に謁見しての帰路かへりみちである。

更に千六百十五年（慶長廿、元和元年）の支倉常長もこの地を訪ねてゐる。一行の羅馬に向ふ路にマドリイにフェリペ三世に謁し、それより アルカラ ダロカ Alcala, Daroca を経て、馬車でこの市まちに來り着いたのである。

杳太郎は最初の引用のあとに、さらにグワルチェリの『日本遣欧使者記』からの引用を加えている。次の引用のあとには、シピオネ・アマチの『奥州記』からの引用を付記している。こうした紀行文にもキリシタン研究の成果が出ているのが、『えすばにや・ぼるつがる記』の大きな特徴である。杳太郎はこの歴史ある街の景観を次のように描いている。

サラゴツサ Zaragoza には午後着いて、まず何よりも市まちの見物に出かけた。広い エプロオ Ebro の河、それに渡した七つの穹窿(きゅうりゅう)〈ドーム〉のある石 プエンタ・デ・ピエドラ 橋、是が何と云つてもこの市の景観の第一である。若し橋を渡って彼岸から見たらば ヌエストラ・セニョーラ・デ・ピラル ラ・セオ Nuestra Señora de Pilar, La Seo 等の大寺、取引所ロンハ（孰れも多大の回教建築の趣味を入れてゐる）の並ならびび聳(そび)ゆるものがあつて、その眺めは一層であらう。

ここでも、杳太郎は支倉常長の一行がこの景観を見たに違いないと考え、「彼等が見たエプロの河、その七穹窿の石橋のたたずまひなどは十分にその当時を想像せしむるに足る」と書いている。サラゴッサのどの景色をみても、遣欧使節たちが訪ねたことを想起しないではすまないのである。しかも、そうした杳太郎の傾向はさらに進み、現実のスペインの景

色にとどまらないで、絵画の世界にもその想像を働かせるようになる。これは、サラゴサを去ってマドリードに到着してのち、同地のプラド美術館を訪れたときのことである。

「サラゴッサ」は1928(昭和3)年10月1日発行の『中央公論』に掲載されたもので、この旅行から4年の歳月が経過している。つまり、旅行後にサラゴサに関する記事を整理してまとめた文章なのである。プラド美術館で見た絵は、サラゴサに半日を過ごしたときには、まだ目にしていない。しかし、このエピソードは「サラゴッサ」に書かれていることだから、ここでとりあげることにしよう。

柰太郎は世界的に有名なプラド美術館を見に行ったとき、一枚の風景画に出会って興味をいだいた。それが、ベラスケスの女婿ファン・バウチスタ・マルチネス・デル・マソ(1610頃-1667、柰太郎は1630-1687と表記)の描いた「サラゴサ風景」(ベラスケスとの合作)であった。この街に暴動が起こったあとの1647年に描かれたために、この風景画では七穹窿の石橋の中央部は破壊されていて、前景の河岸には騎馬また徒歩の兵士が物々しげに立っている。しかし、エプロ川の彼方には大建築や尖塔が立ち並び、その上の空こそは重く曇っているが、それと違って注意しないかぎり、さして不安な気分はない。柰太郎はこのように「サラゴサ風景」を解説して、次のように続ける。

若しこの惨憺たる破壊の姿を見ないことにし、またこの歴史的事実からの連想を阻止し、却つて前景の人物中<sup>(かへ)</sup>に、空想的に騎馬の日本人の姿を入れて考へるとしたら、正に是れ貴人に護られつつこの市を過ぎ行くわが支倉が道中図となるのである。

この一節を読むと、読者の空想の中でも、いつしか「サラゴサ風景」が支倉常長一行の



図6 マソとベラスケス(合作)「サラゴサ風景」

騎馬道中図に変わってゆく。プラド美術館で数え切れないほどの人（日本人を含めて）が、この「サラゴサ風景」を目にしたことであろう。けれど、この風景画に日本人の遣欧使節の一行を登場させて、自らの空想の中でキリシタン史の一場面を描きかえたのは、柰太郎以外にいなかったろう。こうした文学的・絵画的想像力を働かせるところに、柰太郎の文学者・画家（柰太郎は生涯にわたって絵を描いた）としての一面がよくあらわれている。半日にも満たない滞在だったけれど、サラゴサは不思議に印象に残る街となった。

次にとりあげるのは、「マドリイ市」である。マドリードで最初にぶつかったのは若い女たちであった。朝にマドリード駅に着いた柰太郎を迎えたのは、布製の赤い花を売る若くて美しい娘たちであって、彼女たちに金を払うと襟にその花を挿してくれる。あとでホテルで聞くと、この花売りは慈善のためのものであるという。この体験のおかげで、いち早くスペインの若い女たちの顔立ち、服装を知ることができた。

彼女たちはみな濃い栗色の髪の毛をしていて、日本でいう黒髪に近い色もある。ブロンドはほとんどなく、明るい褐色も少ない。瞳は茶色が多いが、青味がかかったのも少なくない。服装はまったくア・ラ・フランセーズ（フランス風の意）である。マンティリヤをかぶったいわゆるスペイン風の服装をしているのは、数えるほどしかいなかった。ゴーチエは『スペイン紀行』の中で、マドリードの女は4人のうち3人は美しいと言っているが、柰太郎はそのゴーチエの言葉を肯定している。

マドリードの最も繁華な街区にスペインの地方色を探すことはできない。今のマドリードに見られる第1の傾向は「アメリカ風」である。おそらくヨーロッパの都会では一番アメリカ風であり、旧国首府の品位を見ることはまったくできないと柰太郎は断じている。第2の傾向は「パリ風」ないし「フランス風」である。まず、女性の服装が「パリ風」であり、またカフェ（柰太郎はまだバルという言葉が知らなかったらしい）がこれを代表する。ある程度のホテルの料理は「フランス風」であるという。

つまり、マドリードはいわゆるスペインらしさに欠けていて、「アメリカ風」が幅を利かせている。その国の個性が出るはずの女性ファッションやカフェでは「パリ風」に押されている。料理でさえかなりのレベルのホテルなら、スペイン料理ではなくて「フランス風」料理を出すというのである。マドリードでスペインらしいスペインを感じられなかった柰太郎の嘆息であろう。マドリードという街にはあまりよい印象を受けなかった。

「西班牙の特別の事物に興味のない限り、西班牙といへば、人はまづプラドオの美術館（Museo del Prado）と闘牛とを想起するが常である」。これは柰太郎の言葉だが、彼も御多分にもれず、プラド美術館を見学して、さらに闘牛も見物している。さて、プラド美術館で一番心を打たれたのがベラスケスであった。柰太郎はベラスケスとの出会いを次のように語っている。

側の入り口から入ると、そこに四五幅の歴史画が懸かつて、次の室はもうベラスケスであつた。ちやうど空腹時に前菜も羹あつもの〈スープのこと〉も取らず、直にすてきなビフテキ（『日記』では「すばらしいシャトーブリアン」（分厚いヒレ肉ステーキ）とある）に有りついたやうな感じであつた。たとへが下品だと云ふなら、まるで思ひがけなく天に昇つたやうだと云つて好い。

是でマドリイまで来た甲斐があると云ふものだとさう思つた。（中略）今まで欧羅巴で見た画工のうち一番気に入つたものだとさう直感した。

最大級の讃辞である。食通の杢太郎らしく、料理の比喩が用いられている。杢太郎による作品評は省くことにするが、「フェリペ4世の肖像（半身像）」、「聖アントニオの聖パブロ訪問」、傑作と評価されている「織女たち（アラクネの寓話）」（杢太郎は「製絨工女図」と表記）には言及しているのに、ベラスケス一代の傑作「宮廷の侍女たち」にはまったく触れられていないのは不思議である。このあとで、レンブラントとベラスケスの比較が出てくるが、「マドリイ市」より『日記』（さいわいに6月3日の日記が残っている）の記述のほうがいきいきしているのだから、そちらを引用しておこう。

一寸筆つきの相似からレンブラントマを思ひ出すが、両人の大匠の異なるところはよく分つた。そして自分のことなら予自身の嗜好といふものもよく分つた。レンブラントを伯林でどつさり見た時には大に感心した。すばらしい画工だと思つた。今ベラスケスを見ると感心するよりも、愛執をいだく。（中略）これにはどつしりしたうちにいきがある。しやれがある。軽快な精神が飛やくする。

杢太郎はベラスケスを何よりも直感でとらえている。まず直感が先で、そのあとに批評が来る。だから、感心ではなく愛執なのだ。愛は直感によって始まる。ベラスケスは「粹」であり、「洒落」があり、「軽快な精神の飛躍」なのである。短評ながらベラスケスの特徴を端的にとらえているといえよう。

ベラスケス以外では、ゴヤとエル・グレコについて言及している。ゴヤの「裸体のマハ」「着衣のマハ」の2枚の絵は美しい、マネの「オランピア」などよりはるかによいと感想を述べている。けれども、ゴヤは好まない、ことにたくさんのカリカチュールは自分の趣味に合わなかったと否定的な評価をしている。エル・グレコを大画家とは考えない杢太郎だが、その画面の筆ざわりを實に見事だと評している。それ以外には、「サラゴッサ」で触れておいたマルチネス・デル・マソとベラスケスの合作「サラゴッサ風景」に言及しているばかりである。

先に述べたゴーチエの『スペイン紀行』の言葉と、プラド美術館のベラスケス体験をも

とにして、柰太郎は「ベラスケスの画と美しい女とがなかつたなら、今のマドリイは全く乾燥無味なる近世的都会に過ぎぬ」という言葉を残している。柰太郎のマドリイ評価はこれに尽きるのである。

ブラド美術館の3日後に闘牛を見に行つた。柰太郎は初めて闘牛をその目で見たわけであるが、あまりよい印象を受けなかつた。

予は十数年前に日暮里の屠牛場を見たことがあるが、その際或気分に襲はれた。それは美的であり得るかどうかわらぬが、たしかに異常な感覚情緒であつた。それと同じ気分を予は今日再びここに感じたのである。闘牛は謂ふまでもなく非常に手間をかけた屠殺である。(中略)

我我の如く異邦人として唯一度闘牛場に入るものに向つては闘牛の事たる全く無趣味である。実に悪いしやれである。そこに人情味がまるでないからである。

柰太郎の闘牛に対する見方は即物的かつ冷淡なところが特徴である。ところで、スペイン人にとって闘牛は芸術であり、また闘牛師は芸術家であるといわれる。闘牛を「非常に手間をかけた屠殺」であり「悪いしやれ」と考える柰太郎は、スペイン人の意見にはどうも賛成できなかつたであらう。闘牛に人情味を求める柰太郎には、当然ながら闘牛に熱中するスペイン人の気持ちも理解できなかつた。最後に、スペインびいきであり、闘牛に対して弁護の労をとつたオットー・マースの『スペイン記』に触れて、柰太郎はこの記事を終えている。

日本からスペインに足を踏み入れると、一番当惑するのはスペイン人の時間の過ごし方である。朝は遅く夜も遅い生活のリズムがなかなかつかめない。また、食事の時間が日本とは大きく違っている。柰太郎は朝食のことには触れていないが、「食事の時間が不思議で、昼は二時か三時、夜は九時半から十一時である。それ故食後に仕事することが出来ぬ。食前に仕事することも恐らく出来まいと思ふ」と書いて、仕事の時間がとりにくいことを指摘している。そして、スペイン人とスペインに対して次のような否定的な言葉を書き記す。

予の考ふるに、彼等は実際すべき仕事がない(の)であらう。それ故時を惜しむといふ觀念に乏しいのだらう。学者の数は少く、何れの方面も名作名著に富んではゐないらしい。／西班牙は既にその使命を終わつた人人の国であるかに見える。

柰太郎のいうように、スペイン人には時間を惜しむ觀念がないのかもしれない。どんなに急ぎの用でも、無理してその日で終らせようとせず、「アスタ・マニャーナ(明日にしよう)」ですませるお国柄である。しかし、スペイン人には時間を惜しむ觀念はないのもし

れないが、人生を楽しむ知恵はあるのだ。仕事にしても、日本人の尺度で仕事をしていないだけのことである。学者の数が少なく見えるのも、どの方面にも名作や名著が豊富ではないように感じるのも、スペイン文化について知識が欠けているのが原因ではないか。

発言にはいつも慎重な柰太郎にしては、思いがけない失言というべきであろう。柰太郎はマドリードに初めて来て、いささか失望を味わった。その失望感が高じて、スペイン人やスペインに対して否定的な感情が生まれたのであろう。柰太郎も人の子である。その言葉がつねに説得力をもつというわけにはいかない。

## XXII. スペイン・ポルトガル紀行を読む——トレドとコインブラ

さて、次にとりあげるのは「トレド」である。トレドはマドリードから日帰りでも見物できる距離にある。柰太郎はトレドに1泊しているが、正味1日の旅行とっていいだろう。記述はないが、マドリードから列車でトレドに向ったと思われる。冒頭のところで、自分はイスラム教民の文明および芸術を好まないと明言している。だがトレドに来るともうその影響がはなはだ顕著であるとも言っている。トレドの次に訪れたコルドバは、やはりイスラム文化の影響が色濃く残っている街である。しかし、「コルドバ」という紀行文の中では、その点にはあまり触れることがない。

イスラム文化を嫌う柰太郎であったけれど、「トレドの1日は慰藉(いしや)であつた。それはその有名なカテドラルの為ではなく、寧ろサント・トメ寺院内のエル・グレコの壁画であつた。これは実によく保存せられてゐた」のである。ここで少し補足しておく、グレコの最高傑作「オルガス伯爵の埋葬」(1586～1588)は壁画ではなく、カンバスに油彩で描かれた作品である。縦4.6メートル、横3.6メートルの大作で、上半分がアーチ型をなして、サント・トメ教会の礼拝堂に飾られている。門外不出の作品なので、現物をぜひとも見たい人はトレドまで足を運ばなければならない。柰太郎もそのひとりであつた。

此の寺の大旦那たるオルガス伯爵(えが)の埋葬を画くものである。伯爵の死は古いが、画中にはグレコ生存時の三十六名士の肖像があり、彼自身も亦挿入せられてある。また燭(と)を乗る〈手に取るの意〉黒衣の美少年は画工(むすめ)の女を写したものであるとモリス・バレス(い)〈フランスの小説家、1862-1923〉は曰ふ。

ここでさらに補足すると、本作品は上半分が天上界であり、下半分が地上界となっていて、聖アウグスティヌス(画の右下)と聖ステファヌス(画の左下)が天から下り、伯爵をサント・トメ教会に手厚く葬ったという伝説を描いたものである。一説によれば、若い聖ステファヌスの頭ごしにこちらを見ている男の顔はグレコの自画像という。文中のモー



図7 エル・グレコ「オルガス伯爵の埋葬」

リス・バレスの発言は間違っていて、黒衣の美少年はたしかに少女にも見えるのだが、実際はグレコの息子なのである。

柰太郎はこの名作をどう評価するか書き残していないと思う読者がいるかもしれないが、彼は冒頭にはっきりと「トレドの1日は慰藉であった」と書いている。つまり、この名作に十分満足したという意味なのである。それと同時に、文献探索ではない純粋な旅行を楽しめたという意味も含まれる。

柰太郎は記述していないのだが、トレドは天正遣欧使節が訪ねた街である。ポルトガルに上陸してローマに向う途中でトレドを訪れている。純粋な旅行を楽しんでいたはずの柰太郎であったが、トレドの中心に位置しているカテドラルを見物しているとき、ふと思いついて、「その宝物庫のなかに、何か昔の日本の使節たちを記念する品物でもないかと物色したが、つひぞそんなものはなかった」。やはり、彼にはつねにキリシタン研究のことが頭を去らないのである。

この市は三方から Tajo の河に取り囲まれた、巍峨(ぎが)〈高くそびえるさま〉たる大花崗石上に築かれたものである。停車場から来て、有名橋、プエンタ・デ・アルカンタラ及び同じ名の門、プエルタ・デ・アルカンタラが見え出す頃には実際自分を一人の旅行者だと自覚する。そして世界の不思議の一に入り込むやうな気になる。

「Tajo の河」という聞きなれない固有名詞、「巍峨たる」という珍しい形容詞、「プエンタ・デ・アルカンタラにプエルタ・デ・アルカンタラ」という、似ているようでちょっと違う異国の言葉、これらがかもしだす異国趣味エグゾチスムにひたっていると、読者もまたひとりの旅行者になった気がしてくる。これこそ、杢太郎の紀行文の持つ魔法マジックなのである。もう少し、その魔法にひたってみることにしよう。

殊に月下の散歩がすてきである。民家は多く白色に塗られてあり、道は長沙、杭州に於けるが如く狭い。月がその白壁にあたり、やかましい屋根の隈にほのかな明暗のかけを作ると、無限の空想がそこから蜂起する。

これはまるで散文詩である。トレドの夜の街を散歩する杢太郎は、何よりもまず詩人として文壇に登場した人であった。今夜はトレドに泊るから、ゆっくり夜の散歩をしよう。トレドはことに月下の散歩がすてきである。民家の多くはスペインの基本色の白に塗られている。狭い道を歩いていると、ふと4年も暮した中国の街々の道の狭さが思い出される。月光が民家の白壁にあたり、人の声でやかましい民家の屋根の隅にほのかな（「ほのかな」という形容詞の選び方がうまい）明暗のかけを作る。そこから空想が無限に蜂起する（「蜂起する」という動詞はこんな文脈でも使えることに驚かされる）。まさに、「トレドの1日は慰藉であつた」。

最後にポルトガルの都市から「コインブラ」をとりあげることになろう。コインブラは歴史ある大学都市である。杢太郎が訪ねた当時、リスボンからは汽車で3、4時間も乗れば着ける距離にあつた。しかし、1日に2回しか往復の便が無いので時間のやりくりがむずかしく、6月26日にこの街に着いたのはすでに薄暮であつた。宿を定めてから散歩した街の様子を杢太郎は次のように描き出している。

宿を定めて後市街を散歩したが、街燈は暗く、人影は疎(まぼろ)で、転ろ(すず)に異郷の感を抱くのであつた。宿の直ぐ前は、Rio Mondego の河に沿うて散歩道を作り、そこに大きな蘇鉄などを植ゑる。その石欄(よ)に倚つて河水を眺めていると、蛙の音が頻りにして来、またそこそこに螢が飛んでゐる。河には洲が広く、対岸には時として燈火が揺らめく。微風あつて肌(よ)に冷く、この光景とこの情趣とは、寧ろ甚だ我邦の夏の田園に似通つて

るた。たとへば伏見にでもゐるやうな気分である。

ホテルを決めてから街を散策するのはいつものことである。もう薄暗くなってきたコインブラの街燈はなぜかほの暗く、人影もまばらであった。ここで奎太郎はふと異郷に来たかのような感じを抱く。異郷と言ったのは、いままでスペイン、ポルトガルの街をいくつも訪ねて来たが、そのいずれの街ともちがう印象を受けたからである。ホテルのすぐ前にはリオ・モンデゴ川が流れ、川沿いの散歩道には大きな蘇鉄が植えられて、南国らしい風情がある。石の手すりにもたれて流れる河の水を眺めていると、しきりに蛙の声が聞こえる。あちらこちらには蛍が舞い飛んでいる。いかにも夏の情景である。

コインブラは古都であり、どこことなくひなびた風情があるが、リオ・モンデゴ川で蛙の鳴き声が聞こえ、さらに蛍たちの舞いが見られるとは聞いたことがない。当時のことではあるが、奎太郎の発見であろう。のんびりした街の雰囲気がよく伝わってくる。次の「河には洲が広く、対岸には時として燈火が揺らめく。微風あつて肌に冷く」の箇所などは、まさに名文ともいうべきであろう。さきほど異郷といったばかりなのに、蛙と蛍のおかげで日本の夏の田園を連想してしまった。例として伏見の名前をあげたのは、コインブラも古都であるように京都もまた古都であり、さらに京都の城下町の伏見にもどこかひなびた風情があるからであろう。

このあとで、奎太郎はコインブラの古い建築を紹介している。サンタ・クルス修道院（奎太郎は「<sup>サンタクルス</sup>Santa Cruzの僧院」と表記）（創建は1131年）、旧カテドラル（「<sup>セエリヤ</sup>Se Velha」と表記、同12世紀）、新カテドラル（「<sup>セノヴァ</sup>Se Nova」と表記、同1598年、奎太郎は1580年としている）などの寺院であり、第1のものは後年改築されたけれど、はなはだ古雅であると述べている。さらに、「然しながら予の興味はそれ等のものにはなかつたから、翌朝は直ちに大学に赴いた」と書いている。コインブラ行きの目的はキリシタン文献の探索であることを思い出したのである。

大学は既に十四世紀から此地に創設せられたが、実際活動したのは、十六世紀中葉以後ジェズイト派〈イエズス会〉の手に移つてからである。カモイシュ〈ポルトガル最大の詩人カモンイス（1525-1580）のこと〉も此に学んだ。我遣欧四使節はこの地をば訪問しなかつたが、当時に於いてはここは鬱然たる学府であつたに相違ない。現在の建物は主に十七八世紀に作られたるものであらうが、其の様式に特殊の味があつて、自分を現代的気分から遠からせる。

コインブラを天正遣欧使節が訪問しなかつたと奎太郎は誤記しているが（「コインブラ」の発表は1925（大正14）年2月）、のちにその誤りを訂正している。つまり、彼等はローマ

よりの帰路、1585年の秋ごろにこの地を過ぎたのである。それを1928（昭和）3年7月の追記において、グワルチェリの『日本遣欧使者記』の引用で確認している。なお、カモンイスがコインブラ大学に在籍したことを証明する記録は発見されていないようである。

礼拝堂のそばに建てられた図書館（1724年創設）の内部はきわめて華美なものであった。蔵書の数に10万と称しており、多くはこの国の古典籍である。役員の一りにフランス語を話す者がおり、その人から館長に紹介された。そのためであろうか、館内の閲覧には十分の自由と便宜を与えられたと柰太郎は説明している。彼はたやすく蔵書の目録を調べ、数種の古写本を借り出すことができたが、しかしそれらの写本の中に彼の興味を引くもの、すなわち日本のイエズス会の歴史と関係あるものを見出すことができなかった。「予は二日に<sup>(わた)</sup>互りにこの図書館に来たが、予期した獲物もなく、そこを立ち去るやうになつた」と記している。

河原に出て、<sup>(の)</sup>燈ともしごろの市街を眺めるのが、この街を見る最も好い地点であつた。Serra de Lavra<sup>セルラ デ ラヴラオン</sup>の山の上に築かれた都会であるが、緩い傾斜の円い丘が二つ並び、その上に隙間もなく、白亜又煉瓦の家が建てこめられてゐる。丁度二つの巨大な<sup>(さざえ)</sup>栄螺を二つ逆さに並べたやうな恰好である。この裾をばリオ・モンデゴが流れ、高窓の燈をその面<sup>おもて</sup>に映す。

こんもりした山の上に築かれたコインブラの全景を見るには、柰太郎のいうように夕暮れ頃、リオ・モンデゴ川の河原にでて、その市街を眺めるのが一番いいであろう。傾斜の

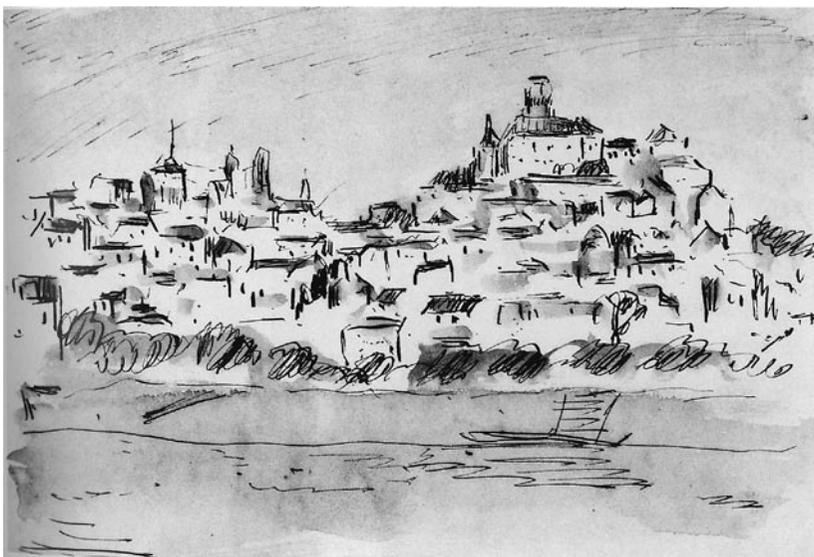


図8 木下柰太郎「コインブラ遠望」

ゆるい丸い丘が二つ並んでいるさまを、二つの巨大なサザエを逆さに並べたようなかつこうだという比喩はなかなかユニークである。「その上に隙間もなく、白垂又煉瓦の家が建てこめられてゐる」の箇所では、「隙間もなく」と「建てこめられてゐる」の二つの表現が見事に呼応している。この一文で杢太郎は文字で絵を描く風景画家となっている。

杢太郎は、天正遣欧使節はコインブラを訪問しなかったと誤解していた。そこで、この使節が訪れた別の都市エヴォラに足を伸ばそうと思ったが、残念ながら時間の都合がつかなかった。コインブラ行きはキリシタン研究の面からは、これといった成果のない旅に終わった。そのかわりに、今まで見て来たように、杢太郎はスペインとポルトガルで珠玉の紀行文を残してくれた。以前に述べたことの繰り返しになるが、三島由紀夫は杢太郎を紀行文の名手と讃えたことがある(II. エグゾチスムの旅「キューバ」、参照のこと)。それは杢太郎の「クウバ紀行」を念頭においた発言であったが、『えすばにや・ぼるつがる記』においても同様に珠玉の紀行文を残してくれたことを、筆者の紹介で納得してもらえれば幸いである。

### XXIII. 木下杢太郎の欧米体験のもつ意味

スペイン・ポルトガルでどのような成果がえられるかは、杢太郎自身、旅行に発つ前から予想していたことである。1924(大正13)年5月22日付の正子夫人宛の手紙には、こう書かれている。「今度の旅行は、小生の日本への土産の一つとなるであらう。又物質的にもこれより報酬が得られるであらう」。すると、土産というのは、今回の旅行で得られたキリシタン関係の文献書誌の数々と数冊の貴重な古書のことになる。ただ、この土産が単に物質的な意味ではなく精神的な意味をもつとするなら、日本キリシタン史への貢献ということになるだろう。

けれども、物質的な報酬とは何をさすのであろうか。考えられるのは、まず『えすばにや・ぼるつがる記』である。これを刊行することで、いくばくかの印税が入ってくるのはたしかである。だが、既に述べたように同書は単なる紀行文ではなく、キリシタン文献探索の書物である。この本の3分の2を占める「外篇」は、初期日本キリシタン宗門に関する研究論文集なのである。つまり、同書は紀行文以外に学術論文も含んだ著作であるから、部数を多く発行するのは難しく印税収入はさほど見込めないと思われる。

さらに、杢太郎が邦訳をめざしていたグワルチェリの『日本遣欧使者記』は、当然のことながら出版を前提としていた。けれども、学術的には貴重な労作ではあるが、専門的でありしかも地味なキリシタン研究の史料なので、これまた報酬が期待されない。つまり売れない本なのだ。実際、「このたび此書が幸に世に出づるやうになったのは、全く岩波書店主人の俠気に由るもの」(「訳者の序」『日本遣欧使者記』所載)だったのである。杢太郎の

経済的な目算は甘かったけれど、彼の「土産」は味もよく滋養たっぷりなものであった。

さて、最後に杢太郎の欧米体験について一つの意見を紹介し、それを検討することによって、欧米体験の意味を検証してみよう。さらに、杢太郎の感性や人となり、さらには生き方について考察してみたい。その意見とは、ドナルド・キーン氏が著書『続百代の過客（下）日記にみる日本人』（金関寿夫訳、朝日新聞社刊、1988年）の中で杢太郎の日記を扱った文章の一節である。『木下杢太郎日記』は従来言及されることの少なかった著書であるが、キーン氏はそれをかなり本格的に取り上げている。

キーン氏は杢太郎の初期の日記を詳細に読み込んで、彼の強烈な自己関心を指摘している。また、伊豆と房総半島の徒歩旅行で観察した自然を描写するとき、杢太郎の日記は文学的に傾いていると述べている。そして若き杢太郎の人柄を次のように想像している。「初期の日記から想像される木下杢太郎（大田正雄）の人柄には、誰しも魅力を感じないではおれない。いささか生真面目すぎるかもしれない。しかしこれは、容易にゆるし得る欠点である」。

ところが、「ある時期から数年間、急に記述がとぎれて、日記が再び始められた時には杢太郎という人物は、まるで別人のようにになっている」というのである。つまり、「その記述はきわめて簡潔で、昔の日記に見られた文学的な書き物とはほど遠く、単なるメモのようなものにすぎない」。鷗外を訪問したときも、ただ事実を述べただけで、杢太郎が鷗外とどんな会話を交わしたかについては記述がない。文学史家としてのキーン氏にはそれが不満であった。

キーン氏にとって、欧米留学中の杢太郎は、初期の日記を書いた彼とは「別人」だった。1921（大正10）年5月27日、杢太郎を乗せた諏訪丸は横浜港を出帆した。これから初めて欧米に旅をするというのに、杢太郎があまり興奮していないことで、キーン氏は少々落胆する。たとえば、アメリカでは、1921（大正10）年6月25日に有名な観光地ナイアガラ滝を見物しているけれど、日記にはただ「今日ナイヤガラ見物」（杢太郎は間違えて26日の項に書いている）との記述があるだけで、その時見たはずの実際の景観については、ひとことも書かれていない。「当時まだ37歳〈正しくは満年齢で35歳〉だったとはいえ、杢太郎が西洋に行ったのは、どうやらあまりにも遅すぎた、と結論せざるを得ないようである」とキーン氏は述べている。

キーン氏に言われるまでもなく、杢太郎自身それをよく承知していた。1922（大正11）年8月10日にパリで書かれた「巴里より」という文章には、「何といても、我々の西洋に来たのは遅過ぎました。もっと若く、世間の事を顧る必要のない学生として此処に來り、少なくとも四五年居なくては欧州文明を味ふことはできません」の文字がみえる。この問題についてはすでに、IX. 杢太郎とヨーロッパ理解、の中で詳しく論じておいた。

キーン氏はパリ到着以後の日記について、研究や勉強のことについては、ほとんど何も

書かれていないことを指摘している。書かれているのは、フランス語に上達するために読んだ本、見物した美術館、オペラ座やフォリー・ベルジェールで観たもの、コンサートや芝居などのことである。また、マドレーヌ寺院のミサ、ソルボンヌで聴いたフランス人学者ルヴォンによる日本文学史の講義、さらには高級なレストランでの食事なども、書き忘れてはいない。キーン氏の文章の結論は次のようなものである。

要するに、パリにきた知識人がやりそうなことは、すべてやったのである。ところが彼の日記に欠けている唯一の要素はなにか？ それはほかでもない「感激、」なのである。

そもそも奎太郎が、パリで勉強すること自体が間違いだったのだ。ウィーン（彼はこの都が気に入った）か、それともどこかドイツ語圏の都会へ行ったほうが、少年時代に形成された彼の趣味には、もっと適していたのではあるまいか。それよりも第一、ヨーロッパへ来るといふこと自体が、間違っていたのである。

奎太郎の欧米滞在中に欠けている要素が「感激」であることは認めてもいい。ただし、唯一の要素とまでいうことはできない。「感激」というよりも「感動」といいかえれば、より正確になるだろう。欧米で過ごした3年3か月の歳月を振り返ってみても、たしかに奎太郎が「感動」を受けた経験はあまり思い浮かんでこない。むしろ、その感動が欠如していた時期ならすぐに思いつく。ここで、その例をあげておこう。

奎太郎は1923年（大正12）年の2月から4月の半ばまで、70日間にわたる期間をイタリアの旅に過ごした。これは特別な目的のない、観光旅行といってよいものであった。医学研究から解放されて、純粋にイタリア旅行を楽しめばよかつたはずである。ところが、奎太郎はこの旅行を心おきなく楽しむことができなかつた。奎太郎はその理由をこう説明している。どんなことでもただ名前と幻想である間はいいが、いよいよ実物と交渉を始めると、なかなか美しく良いことばかりではない。イタリア旅行がそうで、古作品（歴史的遺産である美術や建築）を観ることは、もはや興味より仕事になりうんざりしてしまったというのである。

奎太郎はイタリア旅行の前年、ヨーロッパ理解について思索を重ね、ギリシア・ラテン的なヨーロッパ理解に到達した。けれども、その前提となる古典語、つまりギリシア語・ラテン語を習得する時機を逸してしまった。あたらしいヨーロッパ理解の道を断念せざるを得なかつた。そんな奎太郎だったからこそ、イタリアでヨーロッパ芸術の精華を見るにつけ、ヨーロッパの歴史のもつ重さに押しつぶされてしまい、感動を受けるどころではなかつたのである。まさに、イタリア行きは感動喪失の旅であった。この旅行のもつ問題については、XIV. イタリア——義務の旅、で詳しく論じてある。

このイタリア旅行は極端であったが、欧米滞在時に書かれた紀行文や日記や手紙を読んでみても、それらの書き物に感動体験を多く見出すことはできない。もちろん感動体験がまったくなかったわけではないだろうが、柰太郎はそれを言葉に出すことをいさぎよしとしなかった。感動体験を口に出すと、感動が消えてしまうということだつてある。

当然のことながら、世の中にはいろいろな人間がいる。思い切り感情を表に出す人間もいれば、感情をできるだけ抑える人間もいる。総じて柰太郎は感情を表にあらわすタイプの人間ではなかった。だから、初めて欧米の旅に出かける際に、彼があまり興奮していなくても落胆する必要はない。興奮というものは、若い時を別にすれば、柰太郎から最も遠い感情だからである。

「感激」（「感動」といいかえてよい）が欠けていたからといって、キーン氏のいうように、柰太郎がパリで勉強をすること自体が間違いだったといえるのだろうか。いや、ヨーロッパへ来るといって自体が間違っていたのだろうか。答えは否である。

柰太郎の本業の医学について考えてみよう。彼がこの欧米留学中に本格的に医学研究に取り組んだのは、フランスにおいてである。まずパリでは、サン・ルイ病院のサブロー教授とパリ大学の寄生物学臨床教室のブラン教授のもとで研究を開始してからは、まさに研鑽の日々を送った。さらにリヨンにおいてはリヨン大学のランゲロン博士と共同で皮膚糸状菌研究を進め、ついに1923年10月に「大田・ランゲロン糸状菌分類法」（柰太郎の本名は太田正雄）を確立させた。これは世界な業績と評価されている。他の誰がフランスへ医学留学しても、柰太郎と同じようなレベルの業績をあげるのは難しいと思われる。

キーン氏のもうひとつの疑問をとりあげてみよう。若くしてドイツ語に堪能でありドイツ文学に精通していた柰太郎は、どこかドイツ語圏の都会へ行つたほうが、彼の趣味にもっと適していたのではあるまいか。これは柰太郎に興味をもつ人間誰もがいさぐ問いであろう。これについては、V.「パリ」到着後3ヵ月、で詳しく論じたように、柰太郎の専門研究（糸状菌研究）にとって、当時はフランスで最も便宜が得られたからである。しかもフランス語にも興味があり、ヨーロッパ文化の精華はドイツではなくむしろフランスにあると考えていたからである。

柰太郎は1923（大正12年）の8月から12月までドイツのベルリンに滞在している。医学研究をするつもりで、ある研究室に入ったら費用が高すぎて仕事にならないと正子夫人宛の手紙（10月3日付）で述べている。さらに、「これから先十数年は独乙の学問は下火になる。仏蘭西語を覚え、仏蘭西の学界と渡りをつけたことはよいことになった」と書いている。ベルリンでドイツの停滞した現状を見るにつけ、自分のフランス留学の正当性を確認していることに注意を促しておく。

さらにまた、正子夫人宛の手紙（10月11日付）では、「今後学問上で仕事をするにはどうしても二ヶ国の文明を知らなければならぬ。独乙だけしか知らぬ留学生は見識に乏しい」

という見解を述べている。これからの学問は、まず外国の文明について知っておかなければいけないが、それもひとつでは足りない、どうしても二つの文明に通じる必要がある。たとえば、ドイツ文明についての知識だけですませるわけにはいかないというのである。ここに、若い頃から親しんだドイツ文明、30代のフランス留学で知りえたフランス文明、その二つの文明の精髓に触れたという壺太郎の自負を見ることができただろう。そんな彼の思いも知らずに、パリで勉強することが間違いだったというのは、余計なお世話というものである。

#### XXIV. 欧米体験が壺太郎に与えた影響

ここで、壺太郎の傍業である文学をとりあげよう。いま「傍業」という言葉を使ったが、現在では壺太郎は医学者としてよりも文学者として知られている。したがって、傍業であった文学が本業となったわけである。このことは、師である森鷗外にもあてはまる。

さて、欧米体験は壺太郎に数多くの文学的創作をもたらした。まずその筆頭にあげられるべきは、欧米各地を訪ねてつづった紀行文である。アメリカ、キューバ、イギリス（ロンドンのみ）、フランス（パリおよびその近郊およびリヨン）、エジプト、イタリア、ドイツ訪問で生まれた多彩な紀行の数々は、壺太郎の才筆によってしたためられた。その多くは、『<sup>そのくにそのぞくのき</sup>其国其俗記』（岩波書店、1939年）に収められている。スペインとポルトガルの紀行は、何度も述べたように、『えすばにや・ぼるつがる記』にすべて収録されている。

次に来るべきは詩である。「海ははるばる朦朧として女人のすがた」との題のもとにまとめられた7篇の詩は、そのうち6篇はキューバ、のこりの1篇はイタリアのソレントで書かれている。前者では諏訪丸船上で見た色硝子の幻像、キューバに向う船上の想い、傍観者としての自覚、キューバの夜の想い出、シェリー酒による若い日の回想などがうたわれている。後者の1篇は、ソレントの宿で見た女の幻想を主題としている。筆者はすでに、「該里酒」と「エスギオの遠望」の2篇については評釈を示しておいた（II. エグゾチスムの旅「キューバ」、XIV. イタリア——義務の旅、を参照のこと）。

パリの生活からは「巴璦山歌」にまとめられる11編の詩が生まれている。そのうちの5篇、「或本の序詩」「女優の評判」「リュクサンブール公園の雀」「マロニエの花」「七つ森」については、XV. パリで生まれた詩——巴璦山歌、に評釈をかかげておいた。なお、ポール・ジェラルディの詩集『おまえとわたし』に触発されて書かれた「怨言」については、平川祐弘氏のすぐれた批評文「パリ時代の壺太郎の詩『怨言』」（『西洋の詩、東洋の詩』河出書房新社、1986年に所載）がある。

さて次は小説・戯曲である。欧米体験から生まれた小説の数は2篇と少ない。それが「古都のまぼろし」と「安土城記」である。欧米体験というよりむしろ、キリシタン文献探索

の旅が生み出した作品というべきであろう（後者の舞台はイタリアのヴェネチアである）。前者については、すでにXX. 小説「古都のまぼろし」とセビーリヤ体験、で詳しく評釈しておいた。

また、戯曲としては「常長」「訴人」「柳家」の3篇があげられる。いずれもキリシタン史に題材をとった戯曲である。「常長」については、XV. パリで生まれた詩——巴瓏山歌、でとりあげて詳しく分析しておいた。「訴人」と「柳家」は、身内がキリシタンとなった人たちの葛藤や悲劇を主題としている。杢太郎が20代のときに書いた処女戯曲「南蛮寺門前」は同じキリシタン物（南蛮戯曲）であっても史実に基づくものではなく、みずからの詩的想像力によって歴史的フィクションを現出させた作品である。ところが、「訴人」と「柳家」の2篇は、すでに学問的なキリシタン研究の道に進んだ杢太郎が、歴史的事実を手がかりとして構想した作品となっている。とくに、「柳家」はルイス・フロイスの『日本史』の第1部第102章に記された京都における事件を用いて、「筋は大体史実に拠つた」ものである（杢太郎はドイツ語訳で読んでいる。松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』第2巻、中公文庫、2000年に邦訳がある）。

同時代フランス文学の紹介も見逃せない。これらは欧米留学から帰国後、昭和になってから書かれた。同時代フランス文学から選ばれたのは、劇作家のフランソワ・ド・キュレル（1854-1928）そして詩人で劇作家のポール・ジェラルディ（1885-1960）のふたりである。自身もすぐれた劇作家であり詩人であった杢太郎らしい選択といえよう。いずれも、フランス滞在時にその存在を知った文学者たちである。同時代フランス文学の紹介についてはまだ触れていないので、ここで少し詳しく取り上げておきたい。

「フランソワ・ド・キュレル」は1928（昭和3）年2月1日および5月1日発行の雑誌『女性』第13巻第2号および第5号に掲載された。杢太郎はつぎのように述べている。ドイツとロシアの現代文学（同時代文学）はかなりよくわが国に紹介されてわれわれになじみ深いのが、フランス現代文学になるとそうはいかない。フランスの政治、文学、社会生活の中には王政時代や革命時代の精神が交錯し、またラテン文化、カトリックの教化から最近の Kommunismus までが入り乱れていて、たやすくは理解しがたい。近頃この国の現代文学の思潮に好奇心をいだいて、ちょっと「垣のぞきをして見た」。この文章もその折々の散歩あとの覚書である。この一節を見ても、杢太郎が同時代フランス文学に興味をもって読書をしていたことがわかる。

キュレルを選んだのは、まず「戯曲界の大立物<sup>タテモノ</sup>」であったことと、フランスのイプセンと称せられた人だけに日本人にはわりあい理解しやすかったからである。ランソンとチュフロの『フランス文学史』第3巻（中央公論社、1963年）をみると、1890年から1905年の間における3大劇作家の中にキュレルを数えている。杢太郎がフランスに滞在していた1921年から24年の時期より時代はかなり前になるが、キュレルが戯曲界の大立者として知

られていたことはたしかであろう。杵太郎も「厳しくいへば現代文学とは言ひ難いかも知れぬ」と注釈を加えている。

このエッセイは『フランソワ・ド・キュレル戯曲全集』（Théâtre complet）に収録された戯曲のほぼすべての梗概を紹介したもので、岩波書店の新版『木下杵太郎全集』第13巻で41ページにおよぶ労作である。杵太郎のいう6、7年前に出た全集とは上に述べた『キュレル戯曲全集』のことで、パリのクレス社（LES EDITIONS G. CRÈS ET C<sup>ie</sup>）から1919年から1924年にかけて出版されたものである。1924（大正13）年といえば、フランス滞在の最後の年にあたる。したがって、杵太郎がこの全集を入手したのは在仏中か、あるいは帰国後かは特定できない。また、とくに記述がないので、キュレル戯曲の上演を観たことがあるとは考えられない。

この全集には、杵太郎の言葉どおり、その作品のひとつひとつに作者による年代に沿った解説（histrigue）を添えてある。収録された12作の戯曲は、「鏡前の舞踏」から「天才の悲劇」まで全集に所載された順に梗概が述べられている。けれども、なぜか最後の「賢者の陶醉」だけは省略されている（つまり梗概は11作品である）。梗概は作品によって出来ばえは異なるが、筋立てが入り組んでいるものが多いせいであろうか、一読してストーリーが彷彿されるところまではいっていない。途中で前の部分を読み返さないと理解しにくいものもある。

この11作品のうちキュレルの代表作であり、現在でも興味を惹かれるのは、「新しき偶像」と「獅子の餌食」であろう。前者では、主人公の医師は科学の進歩のため、ガンの病原体を患者に（最後には自分自身にも）接種する生体実験を行う。後者では、貴族出身で労働者のために働いていた主人公が、のちに獅子（資本家）が強ければ強いだけその餌食も多く、弱い労働者もうるおうことになるとの考えを抱き、労働大臣と手を組む。

歴史学と医療の境界領域を研究している現代フランスの学者ピエール・ダルモンは、「新しき偶像」について、「倫理的かつ哲学的考察の中心にガンを置き、そこで古い偶像（宗教）と新しい偶像（科学）を対立させ」と述べている（河原誠三郎、鈴木秀治、田川光照共訳『癌の歴史』新評論、1997）。とくに、ガンの治療を舞台に登場させ、科学と倫理の問題を扱った作品ゆえに、杵太郎も「戯曲として一傑作たるを失はぬが、其取扱はれてゐる医学に関する問題にも我々の考察に値するものがある」と高く評価している。

さて、キュレル作品の多くの梗概が杵太郎によって紹介された1928（昭和3）年には、早くもキュレルの2作品が翻訳されている。それらは『近代劇全集』第15巻仏蘭西篇、第一書房刊に収められている。すなわち、吉江喬松訳「新しき偶像」と堀口大学訳「獅子の餌食」である。さきほど名前をあげた代表作の2篇が、この時点で紹介されていることに注意を促しておく。

その他に、大関柗郎訳「化石」（杵太郎は「化石人類」と表記）は『現代仏蘭西戯曲傑作

叢書(5篇)』(文泉堂, 1922(大正11)年刊)に収められた。また、小川泰一訳「聖女の裏面」(柰太郎は「聖女の反面」と表記)は『フランス文学の叢書劇の部(6篇)』(春陽堂, 1925(大正14)年刊)に収録されている。つまり、大正のふた桁から昭和のひと桁にかけてキュレルの主要作4篇が翻訳されていることになる。

ところで、キュレルについて柰太郎の書いた以上に詳しい紹介は現在にいたるまで存在しないので、「フランソワ・ド・キュレル」は資料的な価値も無いわけではない。最後に補足しておくなら、残念ながら、この紹介が梗概を述べるのに終始して、柰太郎自身の批評があまり多くないことである。さきほどの「新しき偶像」に対する批評は、むしろその例外である。

さて、つぎは「ポール・ジェラルディ」である。これは1930(昭和5)年7月1日および翌1931(昭和6)年1月1日発行の雑誌『スバル』第2巻第7号および第3巻第1号に掲載された。この文章は、吉井勇編集の『スバル』からの原稿依頼を受けて、一两年前に書き捨てて置いたポール・ジェラルディの著作の梗概を書き直したものである。ジェラルディに興味をいだいたきっかけと、彼の詩集『お前と僕』について、柰太郎はつぎのように書いている。

僕の心の底にはまだ甘いところがだいぶ残つて居ると見え、巴里に居た時、その詩集「<sup>トワ・エ・モワ</sup>お前と僕」を読んでやはり好い気持になつた。これは其頃仏蘭西の女たちの愛読したものである。またコメディ・フランセエズで「<sup>エ・エ・エ</sup>愛する」といふ其人の戯曲が実演された時には、評判が好かつたから行つて見た。

「TOI ET MOI」はお前と僕と云ふのが可い、そなたとわたしと和らげるが可いか、まあ一番現代の語に近い方を取つて置くことにするが、三十二篇の小曲で恋の初と終おのづかとを描いて、自ら一篇の恋愛史を作つてみる。

ポール・ジェラルディは詩集『お前と僕』によって後世に名を残した文学者である。柰太郎のパリ到着が1921(大正10)年10月であるから、彼がこの詩集を手にしたのはたぶん1922年以降と思われる。『お前と僕』の発刊は1913(大正2)年というわけだから、この詩集は刊行後、約10年の歳月を経ても依然としてフランスで愛誦されていたことがわかる。柰太郎詩の特徴のひとつに「軽み」がある(たとえば『食後の唄』の「町の小唄」など)。ジェラルディの『お前と僕』にもやはり「軽み」があるから、柰太郎がジェラルディに関心を寄せたのも不思議はない。

いや、それだけではない。柰太郎が1923(大正12)年にパリで書いた詩「怨言」は、ジェラルディの『お前と僕』の第3章「悲しみ」の第3行から第6行までをモチーフとして展開する。「怨言」の最後にあとがきとして、「ポオル・ジェラルディの『おまへとわた

し』を読みし日」と書かれている（ここでは詩集の題名を『おまへとわたし』としている）。以前にも述べたが、この問題に関しては平川祐弘氏の論文「パリ時代の杳太郎の詩『怨言』」に詳しい分析があるので、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

さて、「ポール・ジエラルディ」は、「フランソワ・ド・キュレル」と同じように、ジェラルディの作品（詩・小説・戯曲）の梗概を取めている。ただ、後者のようにその作品の多くを紹介しているわけではなく、代表的な詩集『お前と僕』、同じく代表的な戯曲「愛する」の他には、小説「序曲」（杳太郎によると『お前と僕』の注解のような作品という）、戯曲「銀婚式」（杳太郎は「銀婚日」と表記）、「大きな子供」（原題の「子供」は複数形）および「奥さん、戦争なんです」の梗概を載せてある。岩波書店の新版『全集』第14巻で16ページを占めていて、「フランソワ・ド・キュレル」の4割程度の分量になる。

ジェラルディの翻訳としては、1925（大正14）年に「銀婚式」が岡田三郎訳で『現代仏蘭西文芸叢書』第11巻、新潮社刊に収められた。また、市原豊太訳の戯曲「ロベエルとマリアンヌ」は『世界名作全集』第34巻仏蘭西近代戯曲集（新潮社、1928（昭和3）年刊）に収録された。辰野隆・鈴木信太郎訳の「愛する」は『近代劇全集』第22巻仏蘭西篇（第一書房、1929（昭和4）年刊）に収められている。

また戦後には、1967（昭和42）年に『愛の詩』の表題のもとに、詩集『おまへとわたし』、戯曲「愛する」および「デュオ」（コレットの小説による三幕劇）の3作を取めた作品集が刊行されている（山本勇訳、鷺の宮書房刊）。このようにジェラルディの翻訳は少なくないので、現在では「ポール・ジエラルディ」に資料的な意味はさほどないが、この詩人について杳太郎の関心のありどころを示してくれる。

キュレルはもちろんだが、ジェラルディでさえ現在は忘れられた文学者である。杳太郎が紹介文を書いた昭和初期においては、これらの梗概による紹介も一定程度の意味を持ちえたであろう。しかしながら、現在においては二人の文学者への関心の低下および評価の低落に従って、杳太郎の業績としてはあまり重要性を持たない。けれども、フランス滞在中における杳太郎の同時代フランス文学への関心がどんなものであったか、その一端を知るためには、忘れることができない資料といえるだろう。

最後にとりあげるキリシタン研究は、文学というより歴史学であり、学問の一分野である。欧米留学を終えた杳太郎が、最後に向った土地はスペインとポルトガルであった。何度も繰り返すことになるが、この旅行はキリシタン文献探索の旅であるという特殊性もっていた。若い時代における南蛮文学（「天草組」1907（明治40）年における南蛮詩、「南蛮寺門前」1909（明治42）年における南蛮戯曲）の制作から始まった杳太郎の南蛮熱は、欧米滞在中にまずロンドンで再燃し、さらにパリで大きな火となり、ついには彼をスペイン・ポルトガル旅行に向かわせることになる。

この旅で得られたキリシタン文献の書誌の数々と数冊の貴重な古書をもとにして、『えす

ばにや・ぼるつがる記』の「外篇」が書きあげられたのである。この旅行を契機として杢太郎の南蛮熱は、キリシタン研究という学問に変わってゆく。スペイン・ポルトガル旅行以後も、南蛮文学・キリシタン文学の制作が終わったわけではないが、徐々に学問的研究の比重が高くなってゆくのである。このキリシタン研究こそは、杢太郎後半生の重要なテーマとなったものであり、それを大きく方向づけたのがスペイン・ポルトガルにおけるキリシタン文献探索の旅であった。

いままで見て来たように、欧米体験は杢太郎にとって計り知れない意味をもっている。だから、「ヨーロッパへ来るということ自体が、間違っていた」という意見こそが間違っている。思うにキーン氏は『木下杢太郎日記』を子細に読み込んだけれど、それ以外には、『木下杢太郎全集』に収録された欧米体験を示す文章をあまり読んではいなかったのではない。必要な手を惜しんでは、誤った判断をする危険がある。筆者はキーン氏の『続百代の過客(下)日記にみる日本人』の価値を認めないのではない。あまり人の読まない木下杢太郎の日記をとりあげたことは評価できる。初期の日記を扱った部分は読み込みも深く有益であるが、欧米体験を論じるには資料の吟味が不足していたことを問題にただけである。

杢太郎の欧米滞在は、ときとして懊悩や憂愁や倦怠を帯びることがあったけれども、その懊悩や憂愁や倦怠にも杢太郎らしさがあらわれていた。人生における懊悩や憂愁あるいは倦怠さえも、人を育ててくれるのである。フランス留学がほとんど終わりに近づいた頃、杢太郎は正子夫人宛の手紙の中で次のような文字を残している。「もはや欧羅巴にも倦きて疲労した」(1924(大正13)年3月11日付)。「少し欧羅巴もあきて、近頃はあまり物も渉らぬ」(同年5月10日付)。

人の気持ちはうらはらである。ヨーロッパに倦怠感と疲労感を覚えていた杢太郎であったけれど、その直後とっていいスペイン・ポルトガル旅行では、まるで人が変わったようにいきいきとなった。それは、この旅行ではキリシタン文献渉獵というはっきりした目的があったからである。もうイタリア旅行のときのように、逡巡や停滞はない。ただ、自分の設定した目標に向って邁進するばかりであった。珍しい文献を掘り出した時には、発見の喜びを味わっただろうし、遣欧使節の足跡を訪ねてはさまざまな感慨を覚えたであろう。そうした喜び、感慨といった感情は杢太郎の書き物には直接書かれていないことが多いが、行間にそれが読みとれるのである。

欧米体験は、杢太郎の後半生の出発点ともいえるだろう。とくに、スペイン・ポルトガル旅行のもつ意味は大きい。ここで出発点という言葉を使ったのは、帰国後に彼が世に問うた著作には、欧米体験が響いているものが少なくないからである。1929(昭和4)年に発刊された『えすばにや・ぼるつがる記』はもちろんのこと、1933(昭和8)に刊行されたグワルチェリ『日本遣欧使者記』の翻訳はキリシタン研究の一環であり、その原書を入手したのはバリの古書店であった。

さらに、1939（昭和14）年には紀行文集『其国其俗記』を上梓している。これは欧米滞在中に訪れた各国での紀行文を集めたものである。1943（昭和18）年に刊行をみた『日本吉利支丹史鈔』は『えすばにや・ぼるつがる記』以後に書かれたキリシタン研究論文をまとめたものである。また、これは発刊されたわけではないが、1942（昭和17）年10月に着手された『アレキサンドロ・ワリニアノ師伝』も忘れられない。これは教皇庁の許可をとりタシナリ師と共訳で始められ没年まで続けられたが中断したものである。グワルチェリに続くキリシタン研究の翻訳第2作となるべきものだった。

また、セビーリャでの文献探索から生まれた小説「古都のまぼろし」の中で、「夜」の女の口を借りて、杳太郎は欧米体験以後の自らの生き方を予言している。いずれにせよ、欧米体験は彼の生き方にも影響を与えるほどのものであった。さて、杳太郎の欧米体験のもつ意味について、とりあえず筆者の語りたいことは語り終えた。スペイン・ポルトガル旅行に関して、杳太郎自ら認めた文献考証のもつペダンチズムの臭いが筆者にもうつってしまったのだろうか、本論文（とくにスペイン・ポルトガル旅行を扱った部分）にいささか文献考証臭が感じられるかもしれない。読者のご寛恕を願う次第である。

本論文をまとめるにあたっては、先学の論考に負うものが少なくない。とくに以下の3氏の著書を参照して教えられることが多かった。記して感謝申し上げる。杉山二郎『木下杳太郎 ユマニテの系譜』（中公文庫、1995年）、新田義之『木下杳太郎』（小沢書店、1982年）、野田宇太郎『木下杳太郎の生涯と芸術』（平凡社、1980年）。また、2回にわたる遣欧使節については、松田毅一氏の2冊、『天正遣欧使節』（講談社学術文庫、1999年）および『慶長遣欧使節 徳川家康と南蛮人』（朝文社、1992年）を参照した。

なお、杳太郎のスペイン・ポルトガル旅行については、近年ふたつの文献が出版された。まず坂東省次氏の論文「南蛮文学の創始者—木下杳太郎」（同氏著『スペインを訪れた日本人—エリートたちの異文化体験』行路社、2009年、所載）である。スペインだけしか扱っていないが、スペイン旅行の跡をたどって、その意味をまとめた論文である。次は、テオフィル・ゴーチエ著、桑原隆行訳『スペイン紀行』（法政大学出版局、2008年）である。杳太郎がスペイン旅行に携えて行った『スペイン紀行』がどんな内容だったかを知ることができる。（終り）

## 注

木下杳太郎からの引用は主として、『えすばにや・ぼるつがる記』（岩波書店、1929）に拠った。時に応じて『木下杳太郎全集』全25巻（岩波書店）と『木下杳太郎日記』全5巻（岩波書店）を参照および引用した。引用にあたっては新字・旧かなづかいとした。また、引用文において難しい読み方にはルビをふって（カッコ）に入れた。杳太郎自身のルビと区別するためである。杳太郎自身のルビには若干整理したものもある。さらに、引用文において注をつけるべき箇所には〈カッコ〉内に示した。

## 既発表分の正誤表

『文明 21』の号数	頁	行	誤	正
11号	2	29	アメリカ	<u>北</u> アメリカ
同上	4	5	エ <u>キ</u> ゾチ <u>ズ</u> ムの旅	エ <u>グ</u> ゾチ <u>ス</u> ムの旅 (以下同様)
同上	7	3	文章であります。」	文章であります」
同上	11	17	ブ <u>リ</u> ュ <u>ン</u> プ <u>ト</u> 教授	ブ <u>ラ</u> ン教授
同上	12	8	m <u>a</u> it <u>r</u> e	ma <u>i</u> tre
14号	86	5	二 <u>次</u> 元的な	二元的な
同上	86	27	ヨ <u>ー</u> ロ <u>ッ</u> パ	<u>フ</u> ラ <u>ン</u> ス
同上	94	21	ラン <u>ジ</u> エ <u>ロ</u> ン	ラン <u>ゲ</u> ロン
21号	27	11-12	サン・セバ <u>ス</u> チ <u>ャ</u> ン	サン・セバ <u>ス</u> テ <u>ィ</u> ア <u>ン</u>
同上	同上	12	セ <u>ビ</u> リ <u>ア</u>	セ <u>ビ</u> ー <u>リ</u> ャ
同上	32	15	ル <u>ネ</u> ッ <u>サ</u> ンス	ルネサンス
同上	34	23	エ <u>ジ</u> プト <u>は</u>	エ <u>ジ</u> プト <u>が</u>
同上	43	8	「大馬鹿 <u>者</u> 」	「大馬鹿」 (以下同様)
27号	79	3	マ <u>ア</u> ス師 <u>が</u>	マ <u>ア</u> ス師 <u>の</u> (以下同様)

(本論文は愛知大学研究助成 C-52 を受けている)。